

Title	中国研究集刊 地号（第2号） 編輯後記/奥付
Author(s)	
Citation	中国研究集刊. 1985, 2
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/61129">https://hdl.handle.net/11094/61129</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 編輯後記

\*大川俊隆氏は白川静先生の高弟で、古代漢語研究の俊英である。甲骨文・金文を材料とする論考の発表場所を、学術誌はもっと積極的に提供すべきである。大川氏とは、言語と思想との関係について、将来、協同研究を試みたいと思っている。

\*文献目録によれば、大韓民国における研究論考は相当数に上る。しかし、日本の中国研究者において、残念ながら韓国語学習はまだ普及していないため、その状態がどういうものであるのか、知ることが少ない。今回、竹内弘行氏（高野山大学）の御紹介で咸洪根氏の論文を登載し、情報として大韓民国における中国思想研究の一端を伝えることとした。黄鐘東氏の御翻訳に対して感謝申しあげる。

\*湯浅邦弘は大阪大学助手、滝野邦雄は大阪大学大学院博士課程後期学生、佐藤一好は同前期学生である。

\*昭和五十九年六月二十一日、前任教授の日原利国氏（京都大学）が肝硬変のため逝去された。享年五十七。戒名は智徳院諦信覚道居士。学界は、すぐれた漢代思想研究者を失なった。

日原氏と長く同僚であられた黒川洋一教授（大阪大学）、かつて大学院での受業生であり、かつまた助手として勤務された岸田知子氏、学部から大学院にかけての受業生、大形徹氏（大阪府立大学）に追悼文の御寄稿をお願い申しあげた。もって本研究室として、故日原利国氏に対し哀悼の意を表し、御冥福を祈念申しあげる。

なお、追悼文として、これまでに、坂出祥伸氏（関西大学）の「日原利国氏の早逝を悼む」（『創文』二四九号・昭和五十九年十月）、戸川芳郎氏（東京大学）の「追悼 日原利国さんと『中国思想辞典』」（『東書通信』二四三号・昭和五十九年九月）がある。

私も、日原利国氏の絶筆を収録した『中国書論大系』第八卷（二玄社・昭和六十年六月）の月報に、「日原利国氏のこと・筆順のこと」と題する追悼文を草し、献呈申しあげた。

\*故日原利国氏、戸川芳郎氏、坂出祥伸氏、ならびに私の四人は、年齢の差こそあれ、学生時代、かつて机を並べてともに勉強した時期があった。

その後、二十年近く前にならうか、日原さん、戸川さん、そして私の三人が、広島だったか、岡山だったか、学会があったときに同宿した一夜、夕方から夜明け方五時ごろまで、徹夜で、日本全国の研究状況をつぎつぎと罵倒したことがあった。三人とも酒を飲まず、一晩中お茶をがぶ飲みしながら、まあよく談じたものである。大声でわめいていたため、まわりの部屋の人は寝られなかったらしい。ついに、夜中の二時ごろ、どなただったか知らないが、学会に参加の或る方に「いいかげんに寝てください」とどなりこまれた。しかし、そのあともなお声をひそめてさらにまた数時間、学談、罵倒を続けたのであった。

三人とも若かった。同学として、あるいは研究者仲間として、会えば何度放論高談したことであらう。しかし、遠い昔の思い

出となってしまった。

昭和五十一年三月、私は大病を発した。秘かに死を覚悟した。常に絶筆のつもりで、無我夢中で論文を書き、本を書いた。そのころ、日原さんに死の覚悟を語ったことさえあった。その私が、いつしか小康を得、逆に、あれほど頑健な身体の主であった日原さんが先に速く去ってしまおうとは。

三十年近く前、比叡おろしの底冷えする京都、私は日原さんといっしょに歩いてきた。日原さんは旧制大学院学生、私は学部四年生だったろうか。夜の街を何話して歩いたのか、なに

も覚えていない。しかし、歩き疲れて、京阪四条近くのそば屋にはいり、二人がにしんそばを食べたことは覚えている。そしてそのとき、日原さんがぼつりとおっしゃったことばをしかと覚えていて。加地さん、僕はもうこの三月で学校をやめます、ということばだった。私は何も言えなかった。学部学生の私に何ができたろう、ただ黙ってにしんそばを食べ続けるだけであった。遠い。すべてはもう遠い思い出となってしまった。

(加地伸行)

---

中国研究集刊

地号（1985年6月21日発行）

編輯・発行

大阪大学文学部中国哲学研究室

加地伸行

郵便振替口座番号

大阪6-34413

中国研究集刊

印刷・タカラ写真製版社